

# 「若紫」授業化の構想

～挿絵を援用する古典学習の試み～

古 田 雅 憲

The Visual Thinking Strategies for  
“Wakamurasaki, The Tale of GENJI”

Masanori Furuta

## 【はじめに】

このところ毎年、大学一年生を相手に、信貴山縁起や道成寺縁起、彦火々出見尊や小敦盛などといった絵巻類を取り上げて、「絵を読む・言葉を読む」といった「古典に親しむ」ための講義を試みている。主旨は、幼児教育および初等教育に携わろうとする学生たちが、たとえば絵本・紙芝居・人形劇などを用いた保育や教育を実践する際に、ともあれ「常識」としてわきまえておくのが良さそうな日本語・日本文学・日本文化に関する知見を学ぶ、といったところにある。「古典を学ぶ」と聞けば、とかく「音読・暗唱」, 「語注・現代語訳」, 「文法」, 「有職故実」, 「文学史」など「読む・書く・覚える」学習活動を想像しがちな学生たちに、「見る・話す・聞く」活動によっても豊かな学びは達成しうるといったようなことを体験してもらっているわけである。

講義後には毎回、出席確認の代わりに三百字程度の文章を書いてもらっているが、「○○絵巻は資料集や教科書の挿絵で見たことはあったけれど、それについてじっくり観察してみたり、考えてみたりした経験はなかった」のような感想も少なくない。「言葉を読む」授業がとても充実しているのに比べては、やはり「絵を読む」学びの機会は少ないと思われてならない。

言うまでもなく、日本語の文化は「読む」ばかりでなく、「見る・話す・聞く」活動によっても想像・継承されてきた。たとえば「絵解き」である。今日

なお伝わる「道成寺縁起絵巻」の絵解き説法などを思い起こしてよい。それは巻子ならではの横長大画面を自在に駆使して、「安珍・清姫」の恋物語と法華経による救済とを語ってゆく。むろん詞書や絵解き台本を踏まえはするが、それに拘泥しすぎることがない。参詣の善男善女を飽きさせることなく日常的な話題や冗談のあれこれも織り交ぜつつ、物語は面白おかしく展開される。参詣者たちは笑い転げたり感心したりするうちに、いつしか霊場道成寺の縁起に立ち会い、その不思議をスムーズに観想させる仕掛けに酔う。教義の深淵もまた自ずから得心できるはずである。かつての凡下たち——文字を知らず教養も定まらなかったろう人々もまた、絵解きを通じて「古典に親しむ」ことができたはずである。その「絵解き」のような古典享受の場に想を得た教育プログラムが、今日多くの若者たちの「古典離れ・古典嫌い」を眼前にしては、やはり特に必要なものと思われて仕方ない\*1。

ちなみに、小学校・国語科では学習指導要領の改訂を承けて、「伝統的な言語文化」の学習が昨年度から始まっている。新たに編み直された国語科の教科書の中には、『鳥獣人物戯画』について現代語で読み解いてみせる素材（『鳥獣戯画』を読む）/光村図書「国語 六 創造」）や、『風神雷神図屏風』について visual thinking を行う素材（「この絵、わたしはこう見る」/同）が取り上げられている。古典絵画を参観しながら伝統的な言語文化に触れたり、絵を見ながら「話す・聞く」力を高めたりという授業構想は、初等教育で既に始まっているのである。そのような学びを体験してきた生徒たちを迎えては、中等教育国語科における古典の学びもやはり多様な授業実践上の工夫が模索されてしかるべきであろう\*2。

如上の問題意識から、小稿では、高等学校国語科の現行教科書に添えられた古典絵画を援用しながら行う「古典の授業」を提案してみたい。

### 【高校教科書における「源氏物語 若紫」の実際】

そのような問題意識に発した提案を行おうとする場合、やはり「源氏物語 若紫」を学習材として用いるのがよい。特に「垣間見」とか「小柴垣のもと」などと題される箇所は、高等学校の古典学習材としてきわめてポピュラーであ

るが上に、「源氏絵」の題材としても多く用いられているからである。

実際、現行・高等学校国語科の教科書を一覧すると、「若紫」を採用している教科書は十一社・二十五冊を数えることができる。具体的には、大修館書店「精選古典 改訂版」,「古典1 改訂版」,「新編古典 改訂版」,三省堂「古典講読」,「古典[古文編] 改訂版」,第一学習社「改訂版 標準古典」,「標準古典講読 物語選」,「改訂版 古典 古文編」,明治書院「新 精選古典」,「高校生の古典」,東京書籍「新編古典」,「精選古典」,「古典 古文編」,右文書院「源氏物語・大鏡・評論」,「古典」,「新古典」,「新編古典講読」,ピアソン桐原「古典(古文編) 改訂版」,日栄社「物語文学選」,教育出版「古典 古文編」,「古典名文選 古典講読」,筑摩書房「古典」,「新編 古典」,「精選 古典 古文編」,数研出版「古典 古文編」である。

それらのうち二十一冊が抄出する本文は「日もいと長きに、つれづれなれば」から始まる一節である(「人なくて、つれづれなれば」とする右文書院の四冊を含む)。それ以外でも、第一学習社「改訂版 標準古典」と「標準古典講読 物語選」はそれよりやや後段の「清げなる大人二人ばかり」以降を抄出するものであるし、また「若紫」冒頭から抄出する筑摩書房「新編 古典」と「精選古典 古文編」もこの一節を含んでいる。すなわち、光源氏が北山の僧坊で小柴垣の間から紫上を見初める場面について、すべての教科書が採録しているということである。

また、三省堂「古典講読」以外の二十四冊には本文の場面に照応する挿絵が添えられている。その多く(十三冊)は土佐光吉「源氏物語画帖」(京都国立博物館蔵)からの引用で、その他「承応版・絵入源氏物語」や狩野永徳「源氏物語図屏風」,長次郎「源氏物語絵巻色紙帖」などから引用する教科書もある。

ただしその多くは、本文編集の都合で縮小されていたり、あるいはトリミングを経た部分抜粋であったり、モノクロ写真であったりする。が、そのなかで大修館書店の「精選古典 改訂版」と「新編古典 改訂版」,教育出版「古典名文選 古典講読」の三冊は誌面(アート紙)いっぱい絵をフルカラーで掲載している。「絵を読む」学びを試みるにはたいそう使い勝手がよい。

そこで小稿では大修館書店の「精選古典 改訂版」を用いながら、「源氏絵」

を援用して行く「若紫」の授業構想を提案してみたい。

### 【「若紫」教材化の構想(1) / ワークシート①による導入】

指導者から「今日から教科書70～74頁『源氏物語 若紫』を学習します」のように告げた後、教室全体で本文を概観してみたい\*3。まずは目で追うよう指示した上で指導者が範読することになろうか。むろん学習者たちの習熟に応じては、教室全体で斉読させても良いし、指名音読させても良いだろう。

次に〔ワークシート①〕を配布したい。それは、教科書巻頭に掲げられたくカラー口絵>土佐光吉筆「源氏物語画帖 若紫」図のモノクロコピーを中心に配し、適宜〔解説〕と〔問〕とを添えた一葉である（書式は任意である、下掲図版はその一例）。

<p>「源氏物語 若紫」 「ワークシート①」</p>	<p>〔解説〕 この絵は、土佐光吉（一五三九～一六二三）という画家が、「源氏物語 若紫」教科書70頁に描かれている場面を一枚の絵として描いたものです。</p>	<p>〔問1〕 この場面の季節はいつだと思えますか。→そう思ったのはなぜ？</p>		<p>〔問2〕 ここはどのような場所だと思えますか。→そう思ったのはなぜ？</p>	<p>〔問3〕 いま何時ごろだと思えますか。あたりはどんな様子？ →そう思ったのはなぜ？</p>
--------------------------------	---	---	--	---	--

以降、〔ワークシート〕に添えた〔解説〕や〔問〕によって学習者たちを支えつつくカラー口絵>を観察させ、必要に応じて〔ワークシート〕の源氏絵に書き込みをさせながら、教室全体の学びを深めてゆこうとするのである。

なお、この学習活動に際しては、プロジェクター等で〈カラー口絵〉を拡大投影して教室前方に掲げたい。教室全員で同じ絵を見ながら、時に指し示したりしながら、あれやこれやと話したり聞いたりすることが上述の「見る・話す・聞く」学びを活性化するからである\*4。



〔ワークシート①〕に添えた〔解説〕と〔問〕とは次のようなものである。

〔源氏物語 若紫〕〔ワークシート①〕

〔解説 1〕

この絵は、土佐光吉（一五三九～一六一三）という画家が、「源氏物語若紫」（教科書 70 頁～）に描かれている場面を一枚の絵として描いたものです。

〔問 1〕

この場面の季節はいつだと思いますか。  
—そう思ったのはなぜ？

〔問 2〕

ここはどのような場所だと思いますか。  
—そう思ったのはなぜ？

〔問 3〕

いま何時ころだと思いますか。あたりはどんな様子？  
—そう思ったのはなぜ？

ここでは、この場面の「時間」と「空間」とについて教室全体の学びが深まるよう、指導者としては適切な支援を心がけたい。

まずは、この場面の「季節」について考えさせたい〔問 1〕。

これについては、咲き誇る桜花が画面中央に大きく描かれていることを指導者が示唆しさえすれば、学習者たちは口々に「春」と指摘することができるだろう。それを聞いて、本文リード文中に見える「光源氏十八歳の春」という語句を思い出し、「なるほど」と気付く学習者がいれば面白い。それも優れた学

びの姿と言って良い。「見る・話す・聞く」学び（画面の観察）と「読む」学び（文章の読解）とが統合的に深まってゆくこと——教室全体として、絵と言葉とを行きつ戻りつしながら学びが深まってゆくことを大切にしたい。

ここでさらに、指導者から「画面の上下や中央に細長くたなびいている金色のものは？」のように問うてみるのが良い。その言葉に導かれて、学習者の間から「雲や霞が光っている」などの声が寄せられるだろう。この点、本文冒頭の一文「日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて」を思い出して「なるほど霞か」と言う学習者もいよう。それもまた良い気付きと言うべきである。

ともあれ教室全体で確認しておきたいことは、「この場面は、花と霞とがあたり一帯を朧に霞ませているような、春爛漫の景色らしい」という点である。



ちなみに、数研出版の「古典 古文編」（平成19年検定済、同23年発行）は「若紫」本文の冒頭からすべて採録していて、そこには「三月のつごもりなれば、京の花さかりはみな過ぎにけり。山の桜はまださかりにて、入りもておはするまに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば」という一節が見える。この画面の描出に踏まえているのは、やはりそれらの表現であろう。いま小稿に用いている教科書はその部分を採録しない。「絵と言葉とを行きつ戻りつ」という教える側の都合からすれば「無い物ねだり」したいところだが、やはり本文の抄出や挿絵の扱いを巡っては編集上の判断や事情もあるだろう——悩ましい課題のひとつではある。



次にこの場面の「場所」について[問2]。

学習者が画面を観察しながら描かれた「場所」について自ら想像を巡らすのは、やや難しいかも知れない。指導者から「画面奥、斜め左右に流れる白い筋として描かれたものは？」のように問うて支える必要もあるだろう。その言葉に導かれて、それが「見え隠れして右に左に流れ落ちてゆく滝」であり、この場所が「起伏ある山あいの地」であることに学習者が気付くよう、適切な支援を心がけたい。

あるいは、先に触れた「雲や霞」を念頭に置いて、「皆さんが言った雲や霞の沸き立つところはどんな場所？」などのように指導者があえて強調することによって、学習者の間から「山あい」という言葉を引き出すこともできるか知れない。さらに「山あいの場所だとすれば、ここに描かれた立派な桜を植えたのは？」などのような指導者の問いかけから、「それは造り込んだ庭園の植栽ではなく、山の斜面に自生するものだったか」のように声を発する学習者がいれば面白い。

また別に、本文リード文中に見える「彼は熱病にかかって苦しみ、京の北方の山に住む僧のもとにおもむいて」という語句を思い出して、「なるほど、山あいか」と気付く学習者もいるだろう。それもまた優れた学びの姿と言って良い。

ともあれ教室全体で確認しておきたいことは、「この場は洛中の大邸宅ではなくして、山あいに設えられた住まいであるらしい」という点である。



次にこの場面の「時刻」について[問3]。

学習者が画面を観察しながら描かれた「時刻」について自ら想像を巡らすのは難しい。もし「金雲」から「雲霞が金色に輝く日暮れ時」と想像を巡らせた学習者がいれば面白い。むろん「金」雲は常套的な飾りでこそあれ、リアリズムの表現などではあるまいが、それはそれと教えつつも一方では、学習者の自由闊達な観察眼と想像力は大いに賞してやって良い。

が、この点については、やはり指導者から「本文リード文にはどう書いてある？」のように問うて支えるのが自然な展開と言うべきだろう。その言葉に導かれて、リード文「その日の夕刻のことである」や本文「夕暮れのいたう霞みたるに」などの表現に気付いた学習者の間から、「夕暮れ時」という声が寄せられるに違いない。

さらに発展的には、室内の女性たちが素顔を露わにしている点に学習者の注意を向けさせるような問いかけを、指導者から行っても良いだろう。面に姿を現さないのが貴女のたしなみであった往時にあって、彼女たちがかくも「油断」しているのは、もちろんここが山あいの人の気配も少ない場所だからでもある

だろうが、それに加えて、日も傾いてあたりが夕闇に包まれようとしていたから、と想像をめぐらすこともできるだろう。

それを承けて、「いや、教科書本文では『惟光の朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。簾少し上げて』とあるから、簾の向こう側にいる彼女たちの様子は、画面に描かれたほど丸見えではなかった筈である」——そのように反論する学習者もいるか知れない。

さらにまた、「いやいや、本文の先に『さては童部ぞ出で入り遊ぶ』とあるから、童女たちの姿はかなり見えていた筈である」——そう再反論する学習者がいればもっと良い。

このような話題で話したり聞いたり、また再び画面に向き合ってよく見たりしながら学習者の学びが活性化するならば、それはそれで面白い。そのような多様な気付きを学習者が持てるよう、指導者は様々な支援を心がけたい。

ともあれ、ここで教室全体で確認しておきたいことは、「今しも日は山蔭に沈みつつあり、あたりはとっぷりと夕闇に包まれようとしているらしい」という点である。



さて、画面に描かれた源氏は目を凝らしての垣間見に余念ないが、彼の視線の先にある人影は、花蔭と霞の向こう側にぼんやりと浮かぶ朧である——それはまた、刻々と濃さを増す夕闇の中に、瞬く間に消えてゆこうとしている。

むろん図像化の常として鑑賞者に「見せない」ということはあり得ないから、室内外の人々や様々な設えは、開け放たれた藪やその陰に巻き上げられているはずの簾に遮られることもなく、とても美麗に細々と描き出されている。

が、そのあれこれは実は、画中の人物には「よく見えていない」こともあるのだろう。この画面に画者が筆を尽くして描き込んだ桜花と金雲とは、そのことを仄めかすアイテムである。わたしたち鑑賞者には「見えている」ものが源氏には「見えていない」、「見えていない」からこそ彼は「もっと見たい」とときめく——桜花と金雲とは、隠されることで増幅する源氏のときめきを、わたしたち鑑賞者にそれと知らせる回路である。



## 【「若紫」教材化の構想 (2) / ワークシート②による展開】

続いて〔ワークシート②〕を配布したい。

ここでは物語の展開を追いながら、まずは登場人物たちの様子や所作について教室全体の学びが深まるよう、指導者としては適切な支援を心がけたい。

〔ワークシート①〕同様に「若紫」図に〔問〕を添えたものだが、〔②〕では、絵と言葉とを行きつ戻りつしながら学びが深まってゆくことをより大切にするために、教科書本文の冒頭（「垣間見」章段の第一段落）も掲げている（下掲図版）。

<p>〔問 4〕 画面左下の男性二人のうち、どちらが光源氏だと思えますか？—彼らは何をしていますか？</p>		<p>本文第一段落</p> <p>①日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ。</p> <p>②人々は帰したまひて、惟光の朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持仏す系たてまつりて行ひ尼なりけり。</p> <p>③藤少し上げて、花奉るめの。</p> <p>④中の柱に寄りゐて、膝息の上に絛を置きて、いとなやましげに読みたる尼君、ただ人を見えず。</p> <p>⑤四十余ばかりにて、いと白うあてに、やせたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、</p> <p>⑥「なかなか長さよりこよなう今めかしきかな。」とあはれに見たまふ。</p>	<p>「源氏物語 若紫」〔ワークシート②〕</p>
<p>〔問 6〕 一行はこの場所は何をしに来たのでしょうか？—画面からほとんどんことが想像できる？—本文を読んでみよう。光源氏は彼女たちを見てどう思った？</p>	<p>〔問 5〕 室内の女性たちは何歳ぐらいの人でしょうか？—このなかで、主ある(し)の立場にある人はどの人でしょうか？—それぞれの髪型や背格好を観察してみよう。</p>		

### 「源氏物語 若紫」〔ワークシート②〕

〔問 4〕

画面左下の男性二人のうち、どちらが光源氏だと思えますか？

—彼らは何をしていますのでしょうか？

〔問 5〕

室内の女性たちは何歳ぐらいの人でしょうか？

このなかで、主（あるじ）の立場にある人はどの人でしょうか？

—それぞれの髪型や背格好を観察してみよう。

[問 6]

一行はこの場所に何をしに来たのでしょうか？

—画面からはどんなことが想像できますか？

—本文を読んでみよう。光源氏は彼女たちを見てどう思った？

[本文・第一段落（70-71頁）]

(1-a) 日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ。

(1-b) 人々は帰したまひて、惟光の朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。

(1-c) 簾少し上げて、花奉るめり。

(1-d) 中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みみたる尼君、ただ人と見えず。

(1-e) 四十余ばかりにて、いと白うあてに、やせたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうつくしげにそがれたる末も、

(1-f) 「なかなか長きよりこよなう今めかしきかな。」とあはれに見たまふ。

まず光源氏と惟光の姿について考えさせたい[問 4]。

梅花文様の直衣を身につけ立烏帽子を被っているのが源氏である。小柴垣の隙間から内の様子を垣間見ている。その傍らに控えているのが惟光である。無地の狩衣を身につけ折烏帽子を被っている。立場の上下によって着物（直衣—狩衣）や被り物（立烏帽子—折烏帽子）の別があるということを知らずとも、着物の柄の華やかさや全身像—半身像の差等から、学習者も容易に源氏の誰であるかを看取するだろう。これら装束のあれこれについて詳しく語る必要はないか知れない。ただし「垣間見」については、指導者から補足説明しておくのが良い。

そのうえで、まずは教科書本文の冒頭「日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ。人々は帰したまひて、惟光の朝臣とのぞきたまへば」までを、教室全体で音読してみたい。ここまでに行った[問1]～[問4]に支えられた学びのすべてが、実にこの一文に集約されている筈である。従って逐語訳などするまでもなく、学習者はこの文章に向き合うことができるだろう。

指導者としては、この文章中の「かの」という表現に学習者の注意を向けさせたい。「あの」というからには、源氏は「たまたま」この小柴垣の下にやってきたのではない。彼はそれ以前からそこを見知っていた、そこを目指して（狙って）やってきたのである。



次に「さて、その源氏は何を見たでしょう？」のように引き取りながら、室内の女性たちについて考えさせたい[問5]。

最初に彼女たちの年格好や互いの関係などについて考えさせたいところだが、その際には、まず指導者から「それぞれの髪型や背格好を観察してみよう」などと問うて注目点を絞ってやる必要があるだろう。その言葉に導かれて、「簀子縁の端に立つ女性の髪は着物の裾に届くほど長い」、「その背後にいる女性と室内で立っている女性はおよそ二の腕あたりまで」、「室内奥に脇息に凭れて座っている女性は肩あたりまで」のようなつぶやきを学習者も口々に発することができるだろう。

それを承けて、指導者から「この時代、長く垂らした髪は大人の女性としての魅力象徴するシンボルとされたこと、だから子どもはまだ髪が短いものとして描かれること、また出家した女性も髪を短く切りそろえていたこと」などを補足説明するのがよいだろう。それを聞いた学習者が、「なるほど、だから彼女たちは背が低く描かれているのか」とか、「奥の女性は相応の年齢の尼君だったのか、だから室内奥の上座に居たのか」などと、口々に感想を漏らすようであれば面白い。

このような「見る・話す・聞く」学びを通じて、学習者も「一行の主の立場にあるのが、年齢的にも位置関係からも、やはり奥に座っている尼君であるら

しい」と思い至ることができるだろう。ただし今は、源氏の視線の先にあるのが実は尼君の傍らの少女であったとは、とても想像することはできまい。今は、その子もまた簀子縁上の女性や少女と同じく、尼君に使える侍女のひとりかという理解でも構わない。



次に、女性たちがこの場所に来た目的について[問6]。

学習者が画面を観察しながら自ら想像を巡らすのはかなり難しいだろう。ここはやはり指導者から「一行の主が尼君らしいこと(問5)」や「この場所が山あいになされた住まいであるらしいこと(問2)」をほのめかしつつ、学習者を「一行は山のお寺にお参りに来たのだらう」との想像に導いてゆくのが自然な展開とすべきだろう。

それを聞いて、本文リード文中に見える「彼は熱病にかかって苦しみ、京の北方の山に住む僧のもとにおもむいて」という語句を思い出し、「なるほど」と気付く学習者がいれば大いに褒めてやって良い。

まとまった発話でなくとも良い。学習者が発するつぶやきを指導者が拾い上げるような形で構わない。ともあれ、ここで教室全体で確認しておきたいことは、「尼君が山のお寺にお参りに来ている、尼君には数人の侍女・女童が付き添っている」という点である。



以上のような画面を観察する学びを踏まえて、教科書本文——まずは[垣間見]章段の第一段落に触れてゆくことにしたい(第一段落は5文からなっているが、教授上の便宜を考えてa-fの6つに区切った。)

(1-a) 日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ。

(1-b) 人々は帰したまひて、惟光の朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。

(1-c) 簾少し上げて、花奉るめり。

(1-d) 中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読

みりたる尼君、ただ人と見えず。

(1-e) 四十余ばかりにて、いと白うあてに、やせたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、

(1-f) 「なかなか長きよりこよなう今めかしきかな。」とあはれに見たまふ。

まずは段落全体に目を通したい。本文を目で追うよう指示した上で指導者が範読するのも良いし、学習者の習熟に応じては、教室全体で斉読させたり指名音読させたりしても良いだろう。

次いで、女性たち一行の主と思しい尼君の〔行動・様子・心情〕をざっと区別しながら、まずは〔行動〕について書かれている箇所に学習者の目を向けさせたい。

この点、およそ下記のようなところが指摘されればよい。(難しければ、学習者相互の話し合い学習の場を設けても良いだろうし、指導者が机間指導しながら、学習者のつぶやきを拾うような形でも良いだろう。)

#### [尼君の行動]

・持仏すゑたてまつりて行ふ (1-b)

※「持仏」には教科書に脚注がある。「行ふ」は古語辞書での確認や指導者からの言及が必要か。

・簾少し上げて、花奉る (1-c)

※「簾」は古語辞書での確認や指導者からの言及が必要か。

・中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みみたる (1-d)

※「脇息」は古語辞書での確認や指導者からの言及が必要か。

これらを簡条書きに板書した上で、先に画面の観察から確認した「尼君が山のお寺にお参りに来ている…」ということを学習者に思い起こさせると良い。学習者が自ら「<持仏>や<行う>と言ったり、<経を…読みみたる>と言っ

たりするのは、なるほど寺院参詣であるからだ」と首肯したり、「〈花奉る〉と言うのは、仏様への供花のことなのか」と納得したりするよう、指導者は適切な支援を行いたい。

さらに指導者から「尼君が仏様にお花をお供えする時に使った道具が、画面の中に描かれていますか？」などのように問うて、再び画面を観察してみるように学習者を促すのも良い。その言葉に導かれて、学習者が画面奥・渡殿の高欄外に描かれた檜桶——それは仏様にお供えする闕伽水を汲み置いたものである——に気付けば面白いが、これはやはり難しいか。

また「脇息」を古語辞書で調べた学習者からは「あ、これもまた画面中に描かれている」との気がつきが発せられるだろう。その折、「しかし、その上にお経は描かれていないぞ」とも気付くよう、指導者は適切な支援を心がけたい。画面の観察と文章の読解と、教室全体として、絵と言葉とを行きつ戻りつしながら読みが深まることが大切である。



次に[尼君の様子]について書かれている箇所に学習者の目を向けさせたい。

この点、およそ下記のようなところが指摘されればよい。(難しければ学習者相互に話し合いの場を設けても良いだろうし、指導者が机間指導しながら学習者のつぶやきを拾う形でも良いだろう。)

[尼君の様子]

- ・いとなやましげ (1-d)
  - ※「なやましげ」には教科書に脚注がある。
- ・ただ人と見えず (1-d)
  - ※「ただ人」は古語辞書での確認や指導者からの言及が必要か。
- ・四十余ばかりにて、いと白うあてに、やせたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる (1-f)
  - ※「あてに、つらつき、ふくらか、まみ」は古語辞書での確認や指導者からの言及が必要か。また「髪のうちくしげにそがれたる」には教科書に脚注がある。

これらを簡条書きに板書した上で、「それは画面から見て取ることができですか？」などと問うて、再び画面を観察してみるように学習者を促すのも良い。彼らにしてみれば、画面から見て取れるのは「いと白う」「つらつきふくらか」「髪のうつくしげにそがれたる」の部分だけで、それ以外のことは積極的に受け入れにくいだろう。

指導者にとっては、ここが大切な支援のしどころである。と言うのも、尼君の様子について、歳の頃「四十余ばかりにて」とても「ただ人と」は思えず、しかもどこか「いとなやましげ」であると見て取ったのは誰か——それは尼君の様子を垣間見ている源氏その人である、ということを学習者たちに確認させる絶好の機会だからである。

さらに、それが分かれば、第一段落末の一文「なかなか長きよりこよなう今めかしきかな。」と「あはれに見た」のは誰か——これもまた源氏であった、ということを学習者は容易に了解するだろう。

そのうえで、「なかなか、こよなう、今めかし、あはれ」について自ら古語辞書で確認したり指導者からの言及を聞いたりするならば、学習者は、源氏が尼君の様子を見て心に抱いた感慨をまた自分の気持ちのように了解できるだろう。



さて最後に[尼君の心情]について書かれている箇所に学習者の目を向けさせたい。が実は、尼君の心境を直接的に表現する語句等は第一段落中には見あたらない。ただ、源氏が彼女の様子を垣間見て「いとなやましげ」だと言うからには、決して楽しく笑ってられるような心境ではないらしい——学習者がそのような想像をすることは、後段の読み取りのために大切である。

### 【「若紫」教材化の構想（3）/ワークシート③による展開】

続いて〔ワークシート③〕を配布したい。

ここでは物語の展開をさらに追って、この場面に描かれた一瞬の出来事について教室全体の学びが深まるよう、指導者としては適切な支援を心がけたい。

〔ワークシート②〕と同様に「若紫」図に[問]と教科書本文（「垣間見」章

段の第二，第三段落）とを添えたものである（下掲図版）。

	<p>〔問 7〕 彼女たちは今、何を しているのでしょうか？ —三人が指差す方に —羽の雀がいます が、それはどこか ら飛んできました？</p>	<p>〔問 7〕 実は、光源氏がいち ばん心惹かれたのは、 尼君のそばの少女でし た。 —本文を読んでみよ う。どんなところ から、それが分か りますか？</p>	<p>「源氏物語 若紫」〔ワークシート③〕</p>
<p>①このあたのおとな、「例の 心なしの、かかろわざをして さいなまるこそ、いと、心 づきなけれ。 ゆいづかたへかまかりぬる。 いとをかしう、やうやうなり つるものを、鬮などもこそ見 つくれ。」とて、立ちて行く。 ②髪ゆるるかにいと長く、め やすき人なめり。 ③少納言の乳母とそ人言ひぬ るは、この子の後見なるべし。</p>	<p>本文(第三段落) ①「何事ぞや。童部と腹立ちたまへるか。」と て、尼君の見上げたるに、少しおぼえたること ろあれば、 ②「子なめり。」と見たまふ。 ③「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠のうち 籠めたりつるものを。」とて、 ④「いとくちをし。」と悪入る。</p>	<p>本文(第二段落) ①清げなるおとな二人ばかり、さては童部ぞ出 で入り遊ぶ。 ②中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、 山吹などのなえたる着て、走り来たる女子、 ③あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、 いみじく生ひ先見えて、うつくしげなる容貌な り。 ④髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔 は、いと赤くすりなして立てり。</p>	

「源氏物語 若紫」〔ワークシート③/前半〕

〔問 7〕

実は、光源氏がいちばん心惹かれたのは、尼君のそばの少女でした。  
—本文を読んでみよう。どんなところから、それが分かりますか？

〔本文・第二段落（71頁）〕

(2-a) 清げなるおとな二人ばかり、さては童部ぞ出で入り遊ぶ。

(2-b) 中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなえた  
る着て、走り来たる女子、

(2-c) あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えて、  
うつくしげなる容貌なり。

(2-d) 髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔は、いと赤くすりな  
して立てり。



第二段落は3文からなっているが、教授上の便宜を考えてa-dの4つに区切った。

まずは段落全体に目を通したい。本文を目で追うよう指示した上で指導者が範読するのも良いし、学習者たちの習熟に応じては、教室全体で斉読させたり指名音読させたりしても良いだろう。

その後、少女の[行動・様子・心情]をざっと区別しながら、まずは[行動]について書かれている箇所に学習者の目を向けさせたい。

この点、およそ下記のようなところが指摘されればよい。(難しければ、学習者相互の話し合い学習の場を設けても良いだろうし、指導者が机間指導しながら、学習者のつぶやきを拾うような形でも良いだろう。)

[その少女の行動]

- ・ 童部ぞ出で入り遊ぶ (2-a)
  - ※ 「出で入り」は、画面の観察からは「室内から簀子縁側に出たり入ったり」と見て取れるが、第一段落の詞章からは「少し上げた簾の内外に」と読み取れるところである。
- ・ 走り来たる女子 (2-b)
- ・ 顔は、いと赤くすりなして立てり (2-d)
  - ※ 「すりなして」は古語辞書での確認や指導者からの言及が必要か。

これらを箇条書きに板書した上で、先に画面の観察から確認した「一行の主たる尼君は山のお寺にお参りに来ている…」ということを学習者に思い起こさせると良い。学習者が自ら「お参りに来ているのに、御簾の内外を<出>たり<入>ったり騒がしく<遊>んでいるなんて簾がなってない」とか、「真っ<赤>になるほどゴシゴシと<顔>をこするのは泣いてたのかしらん」のように想像できるよう、指導者は適切な支援を行いたい。学習者のイメージの中で、その少女の幼さが際だって捉えられることが大切である。そのような捉え方ができていればこそ、後段、尼君が口にする——「いで、あな幼や。言ふかひなうものしたまふかな。」という嘆きが理解されるというものである。



次に[その少女の様子]について。

この点、およそ下記のようなところが指摘されればよい。(難しければ学習者相互に話し合いの場を設けても良いだろうし、指導者が机間指導しながら学習者のつぶやきを拾う形でも良いだろう。)

[その少女の様子]

- ・十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなえたる着て (2-b)  
※「白き衣、山吹など」は教科書に脚注がある。また「なえたる」は古語辞書での確認や指導者からの言及が必要か。
- ・あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えて、うつくしげなる容貌なり (2-c)  
※「生ひ先見えて」は教科書に脚注がある。
- ・髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔は、いと赤くすりなして立てり (2-d)

これらを箇条書きに板書した上で、「それは画面から見て取ることができますか？」などと問うて、再び画面を観察してみるように学習者たちを促すのも良い。彼らにしてみれば、画面から見て取れるのは「白き衣、山吹」の部分ぐらいで、それ以外のことは積極的には受け入れにくいだろう。

指導者にとっては、ここが大切な支援のしどころである。と言うのも、その少女の様子について、歳の頃「十ばかり」らしく「顔」も「いと赤くすりなして」いるような幼子ではあるけれども、「扇を広げたるやうにゆらゆらとし」た髪をはじめとして、その姿は「あまた見えつる子どもに似るべうも」なく、「いみじく生ひ先見えて、うつくしげな」人であると見て取ったのは誰か——それは、その少女の様子を垣間見ている源氏その人である、ということを学習者に確認させる絶好の機会だからである。

さらに、それが分かれば、第三段落冒頭の一文、「尼君の見上げたるに、少

しおぼえたるところあれば、『子なめり。』と見たまふ」のは誰か——これもまた源氏であった、ということ学習者は容易に了解するだろう。そのように学びを進めてこそ、「由緒ありげな尼君とその身内と思しき美少女」を見出した源氏の感慨もまた了解できるというものである。



さて[その少女の心情]についてだが、それを直接的に表現する語句等は第二段落中には見あたらない。言うまでもなく、第三段落にこそその顛末が語られるのである。

「源氏物語 若紫」〔ワークシート③/後半〕

[問 8]

彼女たちは今、何をしているのでしょうか？

—三人が指差す方に一羽の雀がいますが、それはどこから飛んできた？

[本文・第三段落 (71-72 頁) ]

(3-a) 「何事ぞや。童部と腹立ちたまへるか。」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたるところあれば、「子なめり。」と見たまふ。

(3-b) 「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを。」とて、「いとくちをし。」と思へり。

(3-c) このゐたるおとな、「例の、心なしの、かかるわざをしてさいなまるこそ、いと、心づきなけれ。

(3-d) いづかたへかまかりぬる。いとをかしう、やうやうなりつるものを。烏などもこそ見つけれ。」とて、立ちて行く。

(3-e) 髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。

(3-f) 少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後見なるべし。

まずは、室内に描かれた女たちの「行動」について考えさせたい[問 8]。

これについて学習者が自ら想像を巡らすのはやや難しいかも知れない。やはり指導者から「三人が指差す方に一羽の雀がいますが、それはどこから飛んで

きたと思いますか？（問8）」のように問うて支える必要があるだろう。その言葉に導かれて、学習者たちは画面を観察しながら容易に雀を発見するだろう。そして、三人の女たちがそれを手で追うようにしている仕草から想像して、口々に「その雀は彼女たちの近くから飛び去った」のように声を発するのは難しいことではあるまい。とは言え、それが室内に転がる伏籠から逃げたものとはなかなか結びつけられないだろう。そこは指導者から補足する必要があるだろう。

ともあれ、ここで教室全体で確認しておきたいことは、画面の観察から「室内の籠内で飼っていた雀が、何のはずみか逃げ出してしまい、女たちが慌ててその後を追おうとしているところ——室内にはひっくり返った籠ばかりが残された」と見て取ることができたという点である。



その上で、本文・第三段落に触れさせてゆきたい。第三段落は5文からなっているが、教授上の便宜を考えてa-fの6つに区切った。

まずは段落全体に目を通したい。本文を目で追うよう指示した上で指導者が範読するのも良いし、学習者の習熟に応じては、教室全体で斉読させたり指名音読させたりしても良いだろう。

その後、指導者から「この部分に何人の人が出てきますか？ その人の名前は何？」などのように問いかけて、文章中に描かれる人物たちの全体像に学習者の目を向けさせたい。この点、学習者にしてみれば、ここまで「尼君、その身内と思しき美少女、侍女、女童、光源氏、惟光」を画面の観察や本文の読解から知っているから、その中から該当者を想像しては口々に声を発するだろう。

次に各文についてゆっくりと読み深めてゆきたい。

(3-a) 「何事ぞや。童部と腹立ちたまへるか。」とて、尼君の見上げたるに、少しおほえたるころあれば、「子なめり。」と見たまふ。

※「おほえたるころ」は教科書に脚注がある。また「めり」の文法的意味については古語辞書での確認や指導者からの言及が必要か。

とまどう様子の学習者がいれば、指導者から「第二段落では誰と誰が向かい

合っていましたか？ 画面ではどうでしたか？」のように問いかけて支えれば良い。学習者はこの一文に、「尼君」と「その身内と思しき美少女」が向かい合っている様子を思い浮かべることができるだろう。この際、指導者からの補足として、両人の面差しに似通うところを見出して「子なめり」と想像したのが源氏であることには言及しておきたい。

(3-b) 「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを。」  
とて、「いとくちをし。」と思へり。  
※「犬君、伏籠」は教科書に脚注がある。

学習者は、この一文から、画面・簀子縁上で雀の子を追っている女童の名が「犬君」であると知る。と同時に、美少女の飼っていた雀を逃がしてしまう粗相をしたのが、その犬君であるとも知るのである。美少女が赤い顔をして（第二段落末）、喧嘩でもしたかと思われる（第三段落冒頭）ほどだったのは、せっかく捕らえた雀を逃がされてしまって、悔しくてならなかったのである。先に[問8]で見て取った場面の含意を、今ひとつひとつ追認しているのである。学習者が「なるほど」と得心していくよう、適切な支援を心がけたい。

(3-c) このゐたるおとな、「例の、心なしの、かかるわざをしてさいなまるこそ、いと、心づきなけれ。」  
※「心なし」は教科書に脚注がある。また「さいなまるる、心づきなけれ」は古語辞書での確認や指導者からの言及が必要か。

学習者は、この一文から、画面・簀子縁上で雀の子を追っている侍女が最初は座っていて、犬君を叱っていたことを知るだろう。

(3-d) いづかたへかまかりぬる。いとをかしう、やうやうなりつるものを。烏などもこそ見つけくれ。」とて、立ちて行く。  
※係助詞「もこそ」が表す意味（懸念・不安）を考えるよう、教科書の

脚注に示唆がある。

その侍女は、美少女の心中を代弁するように逃げた雀を惜しむ言葉を口にしながら、おもむろに立ち上がっては飛び去った方を指して行く。画面に描かれたのはその一瞬の姿であった。

(3-e) 髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。

(3-f) 少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後見なるべし。

※「めやすき」は古語辞書での確認や指導者からの言及が必要か。

学習者は、この二文から、その侍女の様子——髪はゆったりと長く、美少女の後見役らしく小ぎれいな——を知り、また彼女が「少納言の乳母」と呼ばれていることを知るだろう。

### 【若紫】教材化の構想（4） / 「絵解き」によるまとめ

ここまでが画面に描かれた「物語」のすべてである。画面の観察と文章の読解と——「見る・話す・聞く」学びを通じ、教室全体で「源氏物語 若紫」冒頭の一節を読み解いたのである。ここで学習者たちが解いた「物語」について、ひとまとめする意味で、指導者が絵を指し示しながら「絵解き」して聞かせると良いだろう。

#### 〔指導者による絵解き〕

季節は花も盛りと咲き誇る春である。この山あいの寺院の一室に、由緒ありげな尼君の一行が逗留している。折しも夕日は山の端に入りつつ、春霞と花蔭とに包まれたあたりは、いよいよ麗の夕闇に沈んでゆこうとしている。その様子に、室内の女たちも少し気を許したか、その姿をうっすらと現してしまった——惟光ひとりを従えた源氏は、その人の姿を垣間見た。なにやら雀の子が逃げてしまったとか。女童が粗相をしたと訴える少女の声がする。傍らの侍女も女童を叱っている。部屋の隅に伏籠が転がって

る——どうやらこの中に捕らえていたものらしい。

さてその少女に目を凝らして、源氏は美しさに驚いた——主と思しい尼君ともどこか似ているところもあり、娘なのか知らんと思ったりもする。ただ、その尼君は、なぜか悩ましげにしている。そのわけはいったい——。

「そのわけ」が次の段落以降に、「いで、あな幼や。言ふかひなうものしたまふものかな。おのがかく今日明日にとおぼゆる命をば、何ともおぼしたらで、雀慕ひたまふほどよ。罪得ることぞと、常に聞こゆるを、心憂く。」と語られてゆくのである。が、その内容は、この画面よりも後の時間に属する。もはや言葉を頼りに読み解いていく他はない。ただし、絵を見て話したり聞いたりしながら紡ぎ上げた豊かなイメージは以後の読解のためのスキーマとして機能するから、学習者にしてみれば数倍面白い「古文の授業」になるだろう。

以上、教科書に添えられた<カラー口絵>を援用しながら行う「若紫」の学習について、私なりの一提案を述べた。諸賢のご批正を乞う次第である。

### [注]

- (1) 古典教育のあれこれを考えようとするとき、まず藤原(2004)は必見のデータである(参考文献16)。それは、1968年・1981年・1992年・2000年にそれぞれ実施された調査等(参考文献7, 8, 33, 34)を引用・分析して「高校生の古典離れ」を明快に指摘した。そしてその背景に言及し、近年では特に「言語抵抗が引き起こす学習上の困難」が生徒達の間に著しいとした。
- (2) 参考文献17-32など。
- (3) 本教科書は「垣間見(日もいと長きに〜と思ふにも涙ぞ落つる)」と「若草と露(尼君、髪をかきなでつつ〜と思ふ心深うつきぬ)」との二章段構成になっているので、まずは「表題、リード文、垣間見章段」について取り組むのがよいだろう。
- (4) 「見る・話す・聞く」学びを活性化するための方法論として、論者は“visual thinking”の話し方に注目してきた。その詳細や国語科への援用については参考文献1-6, 10-15, 17, 19, 23, 25, 26などを参照されたい。

### [参考文献]

- 1) A. アレナス(2001)『みる・かんがえる・はなす-鑑賞教育へのヒント』(淡交社, 木下哲夫訳)

- 2) A. アレナス (2005) 『MITE! ティーチャーズキット 1 (小学校 3・4 年生)』 (淡交社, 木下哲夫訳)
- 3) A. アレナス (2005) 『MITE! ティーチャーズキット 2 (小学校 5・6 年生)』 (淡交社, 木下哲夫訳)
- 4) A. アレナス (2005) 『MITE! ティーチャーズキット 3 (中学生)』 (淡交社, 木下哲夫訳)
- 5) 上野行一 (2000) 「アメリカ・アレナスの鑑賞教育 日本におけるギャラリー・トークとレクチャーの分析を中心に」 (『大学美術教育学会誌』第 32 号)
- 6) 上野行一 (2001) 『まなざしの共有—アメリカ・アレナスの鑑賞教育に学ぶ—』 (淡交社)
- 7) 大平浩哉 (1989) 『新しい授業の工夫 (第 2 集)』 (大修館)
- 8) 片山富子 (2001) 「古典に親しむ態度を養う国語科学習指導の工夫—古典教材の音声化を通して」 (『平成 12 年度東京都教員研究生研究報告書』東京都立教育研究所)
- 9) 阪本恵美子 (2010) 「挿絵を活用した古典の授業—『源氏物語』若紫巻「小柴垣のもと」の場面を中心に」 (『愛媛国文研究』60 号)
- 10) 三森ゆりか (1998) 「ドイツの言語技術教育⑦討論の授業<絵の分析>」 (言語技術教育 7)
- 11) 三森ゆりか (2002) 『絵本で育てる情報分析力—論理的に考える力を引き出す—』 (一声社)
- 12) 全国大学国語教育学会編 (1987) 「国語教育のための「映像」の位置」 (『国語科教育』第 35 集)
- 13) 丹青総合研究所文化空間研究部 (1987) 『ミュージアム ワーク・シート 博物館・美術館の教育プログラム』
- 14) DOME 編集室 (1999) 「川村記念美術館『なぜ、これがアートなの?』展が仕掛けたもの」 (『ミュージアムマガジン ドーム』42 号)
- 15) 林寿美ほか (1998) 『なぜ、これがアートなの? 展 鑑賞教育の手引き』 (川村記念美術館ほか)
- 16) 藤原マリ子 (2004) 「古典教育の再生を目指して—高校生への意識調査をもとに—」 (『国文学言語と文芸』第 121 号)
- 17) 古田雅憲ほか (2001) 「国語科教育における「絵解き」の意義と指導—さし絵を読む授業の取り組み—」 (『語学と文学』37 号)
- 18) 古田雅憲 (2002) 『『信貴山縁起絵巻・尼君巻』授業化の構想—絵巻を通じて古典に親しむ—』 (『語学と文学』38 号)
- 19) 古田雅憲 (2002) 「さし絵を読む, さし絵で読む—中世文化研究から見た教科書『山月記』」 (群馬大学教育学部国語教育講座編<高橋俊三監修>『山月記を読む』<三省堂>に所載)
- 20) 古田雅憲 (2003) 「<絵解き>教材のねらいと特徴」 (『月刊国語教育』2003. 4 月号)



- 21) 古田雅憲 (2003) 「<絵を読む>から<古文を読む>へ」(『月刊国語教育』2003. 5月号)
- 22) 古田雅憲 (2005) 「『林原本平家物語絵巻・殿上閣討事』授業化の構想」(『群馬大学教育実践研究』22号)
- 23) 古田雅憲 (2006) 「ビジュアル・シンキングの国語教育への援用について」(『西南学院大学人間科学論集』2巻1号)
- 24) 古田雅憲 (2007) 「幼児教育における古典絵画の援用について-群大図書館蔵「新田岩松家旧蔵粉本」の学習材化-」(『語学と文学』43号)
- 25) 古田雅憲, 小野静香 (2007) 「映像メディアを援用した『扇の的』の授業提案~幼児・児童のための古典教育を展望しながら~」(『西南学院大学人間科学論集』3巻1号)
- 26) 古田雅憲 (2008) 「新指導要領に準拠する古典教材の構想~高学年児童のための「源氏物語」の学習~」(『西南学院大学人間科学論集』4巻2号)
- 27-32) 古田雅憲 (2009-2012) 「彦火々出見尊絵巻・図像私註(一~六)-幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために-」(『西南学院大学人間科学論集』5巻1号~7巻2号)
- 33) 文部省 (1968) 「高等学校教育課程都道府県集会研究報告」
- 34) 横山文一・坂井福作 (1993) 「意欲的・主体的に取り組みせる古典(古文漢文)の学習指導」(『新潟県立教育センター研究報告』第143号)

※「源氏絵」の読み解きに関しては実に多くの研究成果が示されている。その主要なものでは参考文献(46)に掲げられているので参照されたい。なお「若紫」図の読み解きについては、特に参考文献35-45に詳しい。

- 35) 秋山虔, 田口榮一 (1999) 『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語(新訂)』(学研)
- 36) 秋山虔, 稲本万里子監修 (2012) 『週刊 絵巻で楽しむ源氏物語五十四帖 05 若紫』(週刊朝日百科朝日新聞出版)
- 37) 石井正己 (2004) 『図説 源氏物語』(河出書房新社)
- 38) 出光美術館編 (2005) 『源氏絵 華やかなる王朝の世界』(展覧会図録)
- 39) 今西祐一郎編 (1997) 『土佐光吉画 後陽成天皇他書 京都国立博物館所蔵 源氏物語画帖』(勉誠出版)
- 40) 岩坪健編著 (2009) 『錦絵で楽しむ源氏絵物語』(和泉書院)
- 41) 神作光一, 中野幸一 (2005) 『絵解き「源氏物語」CD版<1>若紫』(竹林舎)
- 42) 小町谷照彦編著 (2007) 『絵とあらすじで読む源氏物語 溪齋英泉「源氏物語絵尽大意抄」』(新典社)
- 43) 田口榮一他 (2009) 『すぐわかる源氏物語の絵画』(東京美術)
- 44) 中野幸一編 (2005) 『源氏物語画帖-石山寺蔵四百画面』(勉誠出版)
- 45) 中野幸一編 (2007) 『九曜文庫蔵 源氏物語扇面画帖』(勉誠出版)

- 46) 水野僚子 (2006) 「<描かれた源氏物語>のための文献ガイド」  
(三田村雅子, 河添房江編『描かれた源氏物語』<翰林書房>に所載)

西南学院大学人間科学部児童教育学科